

水と闘い半世紀 新たな時代の水防団 ～次世代を担う若年層へ水防の継承～

岐阜市水防協会

はじめに

岐阜市が位置する濃尾平野は、木曽川・長良川・揖斐川の三河川と支派川が網の目のように流れる中、輪中が形成され、我が国を代表する治水の歴史や文化を有する地域です。

特に岐阜県は、飛騨地方の標高三千メートルほどの山々から、西濃地方に広がる海拔ゼロメートルの地域まで、変化に富んだいろいろな地形から成り立っており、ひとたび大雨が降ると、山から低い土地に向かって水が大量に流れ、過去に幾度となく洪水による被害を受けてきました。



伊勢湾台風、市街地を洗う濁流（長良中町付近）
昭和34年9月27日

機能の充実を図り、地域経済、文化の中心として発展を続けています。

また、岐阜市では、天井川である長良川が街の中心部を流れており、市民は自然を享受する一方、大雨による浸水被害など洪水の脅威にもさらされてきました。

50数年前の伊勢湾台風や第2室戸台風、「岐阜県政史上最悪の水害」といわれている、昭和51年の「9. 12 豪雨災害」など、過去幾度となく甚大な被害にみまわれており、さらに昨今は、ゲリラ豪雨と呼ばれる局所的・短期的な豪雨の頻度が多くなっており、水害への備えがますます重要になっています。



壊れた堤防を守る水防団員ら（岐阜市尻毛）
昭和51年9月

岐阜市の紹介

長良川中流域に位置する岐阜市は、織田信長公ゆかりの岐阜城を頂く緑豊かな金華山や、1300年有余の伝統を誇る鶺鴒で名高い清流長良川、かつて多くの旅人が往来した中山道など、恵まれた自然環境を背景に、深みのある歴史や伝統・文化を培い、古くから人やモノの交流・流通の拠点として栄えてきました。

近年においては、岐阜市の玄関口である「JR岐阜駅北口前広場」の完成をはじめ、岐阜の新たなランドマークとなる「岐阜シティ・タワー 43」、「スカイウイング37」の建設、市民病院の改築等により、県都としての都市

岐阜市水防協会の紹介

岐阜市水防協会は、岐阜市所属水防団員が会員の任意団体です。

岐阜市所属水防団は、昭和31年岐阜市岩野田水防団が最初に結成されたのを機に、市内各地域で結成されてきました。

全国的には、消防団が水防活動を実施するのが主流ですが、岐阜市においては、数々の水害に備えるため、専任水防団が成立してきました。

昭和34年の伊勢湾台風など、大水害に見舞われたことで、水防活動の重要性が叫ばれ、水防活動の強化・

充実を目的に昭和36年4月1日に、岐阜市水防協会が設立され、設立当初は11水防団でしたが、現在は29団1621名で活動しています。

伝統的水防工法の継承

江戸時代には、東国の防衛と治水のために徳川家康公が命じ、慶長13年（1608）より、現在の愛知県犬山市から愛知県弥富市までの約50kmにわたって御囲堤（おかこいづつみ）（「美濃の堤は、尾張の堤より三尺低かるべきこと。」とされ、美濃（岐阜県）側の堤防は尾張（愛知県）側の堤防より低くしなければなりませんでした。）を造ったことで、美濃の人々は洪水に苦しめられ、水屋や輪中堤で命と財産を守ってきました。

このため、三河川流域の人々は「輪中堤」を造り、身近な「わら縄」と「麻袋」を使用して「土のう」を作り、水害に備えてきました。岐阜市でもわら縄を使用した「しおり結び」で「土のう」を作って地域を水害から守ってきました。



2万分1地形図「岐阜」(部分)
明治24 (1891)

岐阜市歴史博物館蔵 長良川と長良古川に囲まれて、ヒョウタン形をしていた島輪中のようなすがよくわかります。

特に、当協会所属水防団員が作成する「土のう」には特徴があります。

通常「土のう」は、ナイロン製の袋に土砂を詰め、口を作り付けの紐で結ぶ「口結び」と言われる方法をとっています。これは、袋が丈夫であること、紐を引き締めるだけで簡単にできることから、誰にでも早く大量に作成できる利点があります。しかしながら、当協会所属水防団は、昔ながらの方法で土のうを作っています。昔は、材料といえば麻袋やわら縄しかなく、素材自体が固く容易に口を閉じることができなかつたため、わら縄で全体を十字に締めて、最後は緩みにくい「しおり結び」で「土のう」を作っていました。現在、当協会所属水防

団では、袋こそナイロン製のものを使っていますが、袋全体を包み込むことで、破れにくい強固な「土のう」となるよう、昔ながらの方法で、わら縄を十字に巻き、最後は「しおり結び」の「土のう」を作り、先人たちが編み出してきた技術の継承を絶やさないよう努めています。

地元では、多くの人たちに「水防団」＝「しおり結び」と言われるまでになっています。

さらに昔から、木、竹、むしろなど、堤防周辺ですぐに手に入るものを利用した、各種の水防工法が、迅速に実施されてきました。

それらの水防工法が、地域を洪水から守る「盾」として、所属水防団では伝統的水防工法として継承されています。

水防活動の課題

近年の水害は「過去に経験がない」という表現が多用されるほど、時と場所を選ばず発生しており、各地で未曾有の大水害が発生しています。

その水害から地域を守る最前線で活動しているのが当協会所属の水防団員ですが、社会経済の進展に伴い、産業構造や就業構造が大きく変化し、所属水防団員の実に75%が被雇用者となっていて、団員の確保や、昼間に水防活動を行える住民が不在であるという問題が発生しています。

また、水防活動は地域住民による人海戦術で実施されますが、現在は水防に無関心な地域住民が増えており、水害の記憶の風化及び、水防に対する理解の希薄化が大きな課題となってきました。

課題への対策

前述の「水防活動の課題」についての対応策として、次世代を担う子供たちに対し、過去の大水害を語り継ぎ、伝統的な水防工法の継承を通じて、水防団員が実地訓練を交えた指導を実施しています。そうすることにより、子供から家庭へ、家庭から地域へ、地域住民へと水害に対する意識向上を促すことにつながり、いつ発生するか分からない水害に対し、水防に対する理解の裾野を広げ、「自助」、「共助」が活かされる土壌づくりが推進されています。

また、子供たちへの水防に対する啓発活動は、緊急時に水防活動が少しでも出来る人材を、将来にわたって確保・育成をすることにも、多大な貢献をしています。

水害はいつ発生するかわからないことから、地域の



西郷小学校 土のう作り



三輪中学校 ディスカバリー三輪



三輪中学校 土のう作り

安全を守るため、日頃の啓発活動が必要不可欠です。

防災の第一歩は、自分の安全は自分で守るという「自助」であります。

次に、住民同士が助け合う「共助」が必要となり、水害時に、一人では困難な水防活動が、多くの人の協力、団結により初めて可能となります。災害時に一番重視されるのは「自助」と「共助」であり、地域住民の組織である水防団の活動が重要となるわけです。

具体的な活動紹介

一例として、当協会の会員である岐阜市三輪水防団の活動を紹介します。

・水防啓発活動の実施経緯

前述のとおり、岐阜市では過去に幾度となく水害に見舞われてきましたが、三輪水防団が管轄する三輪地区でも、平成16年の台風23号により大きな被害を受けました。

この水害を契機として三輪水防団では、三輪中学校に対し、水防啓発活動への参加を呼びかけました。

具体的には、三輪中学校で「ディスカバリー三輪」と銘打った総合的な学習の一環として、身近な地域の方々と交流を持つ活動があり、三輪水防団の提案により、その項目の中で水防啓発活動として「水防団活動」が開始されました。

また、「水防団活動」開始当時の中学2年生は、後述の平成16年10月20日の台風23号被災時に小学6年生で、修学旅行を迎える前日に、この災害を経験しています。

家屋が浸水し、楽しいはずの修学旅行が一転した生徒たちの気持ちを察し、水害により苦しい経験をし、そこから得た教訓を生かすため、三輪水防団が開始に積極的に働きかけをし、現在の活動に繋がっています。

・活動の概要

「水防団活動」とは、「ディスカバリー三輪」の項目の中から、生徒自らが選択して参加しており、水防の大切さを学ぶために、水防団員から話を聞くだけでなく、整列の仕方、土のうの作り方、水防工法の訓練など水防団員の指導により、水防団員と同じ活動を生徒に体験させるものです。

その成果として、「水防団活動」に参加する三輪中学校の生徒たちは、岐阜市内の全水防団が集結する「岐阜市水防連合演習」に平成19年度から5年連続で参加するとともに、平成24年度には、国が中心となって開催される「木曽三川連合水防演習・複合型災害防災実動訓練」にも参加するまでになりました。

当初の「水防団活動」は、水防団のお手伝い範囲の活動でしたが、近年は、生徒自ら積み土のう工を作り上げるまでとなり「自分たちの地域は自分たちで守る」という意識をもって、活動が出来るようになりました。

それにより、洪水時における水防活動への参加など、



三輪中学校 木曽三川

災害に対する生徒の意識向上を促すことができている。これは、今まで歴史的にも水害の多い地域ならではの取り組みです。

三輪水防団は、地域と連携し、次世代を担う地域の一員としての役割を果たせるよう生徒を指導しています。

・平成16年台風23号の被害

台風の上陸が相次いだ平成16年に、10番目の上陸となった台風23号は、岐阜県内で猛威を振りました。台風23号は、9月20日午後8時ごろ岐阜市に接近しました。

岐阜市内では、午後7時すぎに観測史上4番目に強い最大瞬間風速30.5mを記録し、長良川の長良橋観測所の水位は、同日午後11時50分、昭和51年9月の9.12豪雨災害を上回る21.53mに達し、金華、長良、芥見、加野、三輪南地区など1,560世帯、約5,000人に避



台風23号 堤防に土のうを積む水防団員 藍川橋上流
平成16年10月

難勧告、避難指示が出されました。

三輪地区でも、同日午後11時30分、岐阜市溝口の逆水樋門付近の特殊堤や世保地区の住宅付近で長良川が越水しました。また、福富迎田地区では福富川が氾濫し、10世帯が床上浸水に遭い、約20人が取り残されました。水防団、警察、消防などが、必死の救助活動を実施し、取り残された住民が救出されました。

この水害により、床上浸水80戸、床下浸水47戸、避難者1,012人、農業被害等、被害総額2億5千万円と記録されています。

・三輪中学校長のコメント（「平成24年度 木曽三川連合水防演習・複合型災害防災実動訓練」当時）

『東日本大震災を踏まえて、学校では防災意識が高まっています。しかし、身近な危険に対する知識や理解・備えは十分とは言えません。そうした中、水防訓練に参加することは、身近な地域で起きた災害を風化させることなく、自分たちの手で地域を守るのだという思いを、高めることにつながっています。』

三輪中学校が、水防訓練に参加するようになって8年が経ちます。その間、一貫して活動を支援してくださったのが、地元三輪地区の水防団員のみなさんです。教職員は異動があり、入れ替わりがあります。活動を始めた頃の思いや地元の願いなど、ともすれば形骸化しかねない状況がある中で、変わらず、「水防の知識」、「土のう積み技術」、「思いや願い」を伝えてくださっています。長きにわたって、継続して支援していただいていることに、深く感謝しています。



三輪中学校 木曽三川連合水防演習に参加

また、三輪水防団をはじめとして岐阜市水防協会のみなさまには、生徒の水防活動を支援していただき、本当にありがたく感謝しております。

このようなご支援があるからこそ、生徒が自発的に参加し、「地域を守るために自分にできること」を考えるのだと思います。将来にわたってこの思いが引き継がれることは、大きな財産だと考えます。学校は、地域の願いを大切にして防災意識を高めるよう、今後も取り組みたいと考えます。』

このコメントは、三輪水防団が実施する啓発活動が、水防に対する理解の裾野を広げ、「自助」、「共助」が活かされる土壌づくりが、推進されていることが感じられる内容です。

また、当協会の活動は、平成23年度に実施した、当協会設立50周年記念事業実施後において、従前より各所属水防団が独自に実施していた啓発活動を、要綱を作成し、単年度で、また、人の入れ替えで終わらせず、継続して実施していく仕組みを作成したことにより広が



長良小学校 授業風景



東長良中学校 土のう捨て

りをみせています。

活動実績は以下のとおりです。

小中学校への啓発活動の実施

- ・平成24年度の小中学生への啓発活動（派遣先6校、参加児童・生徒延べ360人）
- ・平成25年度の小中学生への啓発活動（派遣先8校、参加児童・生徒延べ779人）

地域行事（防災訓練等）において小中学生を参加させ地域住民が一体となった啓発活動の実施

- ・平成24年度（派遣4回、参加者延べ366人）
- ・平成25年度（派遣4回、参加者延べ369人）

今後の取組について

次世代を担う子供たちに、水害に対する啓発活動の実施を継続することにより、「自助」、「共助」といった防災意識が、参加した子供たちを通じて、家族・地域へと広がっていくことが期待できます。



長良小学校 連合演習見学

さらに将来、水防活動を「体験」した子供たちが大人になり、地域住民の核となって水防活動に取り組める環境整備に繋がることが期待できます。

そのため、当協会の会員である水防団員が、活動しやすい環境を整えられるよう、岐阜市水防協会は、さまざまな情報の提供や意見交換会を実施しながら、関係機関と連携し、啓発活動の輪を拡げ、次世代を担う人材育成に尽力していきたいと考えます。

今後は、「岐阜市水防連合演習」等の水防演習に、多くの子供たちが、積極的に参加できる環境作りを目指していきます。

岐阜市水防協会